

説教 「神の恵みに生きる」

(サムエル記上 1 章 20-28 節、ルカによる福音書 2 章 22-40 節)

2023 年 1 月 1 日
仙川教会主日礼拝
大串肇牧師

教会の皆さん、新しい年を迎えまして最初の主日礼拝をわたしたちはともに守っております。1 年の冒頭にて、新しい年をどのように過ごそうか、いろいろ考えたり、計画をしたりしている方も多いと思います。

さて、1 年どころか、自分の一生にあって、長い間、ずっと同じ一つの目標を立てて生きている人物に今朝、聖書の中でわたしたちは出会います。その名はシメオンという高齢者です。彼に関しては詳しいことはわかりませんが、ヨハネの両親であるザカリアやエリザベトのように、「正しい」、「信仰があつい」人物でした。6 節によれば、彼は「主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた」のです。そのシメオンがエルサレム神殿において清めと割礼の儀式を終えたばかりのイエスに出会ったことがここで報じられています。27 節です。

「シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た」。

他方、イエスは誕生後、「主の律法」にしたがってエルサレム神殿で犠牲が捧げられ、主の律法を成就したことが強調されています。別の言い方をすれば、イエスによって新しい時代がスタートしたのです。イエスこそ、古い時代の律法を完成して、新しい救いをもたらすメシアです。その目的のためにこの地上に遣わされたといえるでしょう。こうしてシメオンとの出会いを通して、イエスは何のためにこの地上に来られたのか、その使命や役割が明らかにされます。

シメオンは神への感謝を込めて賛美を歌い上げるのです。

「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、／あなたの民イスラエルの誉れです。」(29-31 節)

この幼子イエスに対するシメオンの賛歌は、伝統的に(ラテン語聖書から)「ヌ

シメオン・ディミッテイス」と呼ばれている讚美歌です。有名な冒頭の「この僕を安らかに去らせてくださいます」という句から始まります。かつてはここには死へのあこがれのような思いが描かれていると誤解されてしまいます。しかしそうではありません。確かに、シメオンを包む心の平安はいわば自分の使命が達成された充足感に似ています。しかし、大事なことは、それを成し得たのは自分ではなく、聖霊を通してであるということです。しかもイエスの救いはシメオン一人にとっての個人的な救いだけを意味しません。イスラエルの「誉」や栄光のために、更には「万民のために」整えられた、「異邦人を照らす啓示の光」となるのです。しかし、その大きな救いはどのようにして実現されるのでしょうか。

わたしたちが留意すべきは、この先のイエスの人生は決して喜ばしいことばかりではなかった点です。メシアは十字架の苦難を受け、死ななければならないからです。なぜ、イエスはメシアでありながら、人々から拒否され、棄てられるのか。その答えはここでは記されていません。しかし重大な問題です。わたしたちの心の中に潜んでいる罪の問題です。

イエスを待っている過酷な運命と最期を母マリアにシメオンは告げました。それが最後のシメオンの告知です。34-35 節です。

「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人々の心にある思いがあらわにされるためです。」

主イエス・キリストの救いは、わたしたちのにとって救いのわいアであり、土台です。他方、イエスを拒否し反対する者にとりまして躓きの石です。わたしたちの心の中にある傲慢さや自己中心な思いがそのような形で現れるのです。しかし剣を通さなければ救いやってきません。イエスがわたしたちの罪の故に十字架におかかりになり、その裁きの剣を一身に引き受けてくださるのです。こうしてわたしたちの罪は完全に赦されるのです。しかしルイエスは死んで終わったのではなく、倒れもしたが立ち上がったお方であり、罪と死に勝利された復活者であることを聖書は証しています。

さて、最後に高齢の女預言者アンナが登場します。36 節以下です。彼女は「非常に年をとって、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、夫に死に別れ、八十四歳になっていた」と紹介されています（36-37 節）。「そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した」とあります（38 節）。彼女の語った言葉は記録されていませんが、おそらくシメオンと同じような賛美の言葉を語ったのだと思います。

わたしたちがこのイエス誕生物語の結びで注目したいのは、やはりシメオンとアンナです。この二人の共通点は、高齢であったことです。特に后者の一人は未亡人です。孤独な生活を強いられていたにちがいありません。しかしながら、後代の教会を支えたのはこういう人々でした。大事なことは二人とも決して後ろ向きではなかったことです、神のなさる恵みを信じて、いつも希望を持っていたという点です。

第二に、シメオンは25節、「正しい人で信仰があつかった」。アンナは「神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていた」(37節)。つまり、神を信じて礼拝し、奉仕し、祈っていた。単純に聞こえるかもしれない、しかしこれがまさに信仰生活であり、信仰者の姿です。エルサレム神殿ではじめて主イエス・キリストに出会った寄る辺なき、二人の高齢者こそ、初代教会を支えた信仰者たちであり、模範となった人たちではないでしょうか。イエスと出会う時、誰もが信仰と希望をもって生きることができる。神の恵みに生きる生活へ招かれていると言えるのではないのでしょうか。

御子イエスは「たくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」(40節)。

わたしたちもイエスと同じように信仰の成長を祈りたいのです。恵み深いイエスのみ言葉をたえず聞き、救いを信じて礼拝生活をまもり、いつも神に感謝し、その聖名を賛美したいのです。そのような信仰生活を通して、「異邦人を垂らす啓示の光」、イエスの愛と恵に包まれて歩んでまいりたいと願います。ご一緒にお祈りいたしましょう。